

Nagoya Urban Institute News Letter ニュースレター

名古屋都市センター

2014.9 vol.101



江戸～明治時代に営業した書肆「永楽屋」の再現モデル
(名古屋城に常設)

[特集]

「弱者の視点」「ライフスタイル提案」 「記憶という資源へのこだわり」……

多様な価値観で地域文化に貢献する名古屋の出版事業

Contents

[特集]「弱者の視点」「ライフスタイル提案」 「記憶という資源へのこだわり」……	1～3
PERSON	4
まちづくり活動助成団体紹介	5
名古屋都市センター研究成果	6～7
まちづくり来ぶらり	8
なごやのまち今昔	9
活動報告	10
お知らせ	11～12



名古屋の出版社が発行するさまざまな書籍、情報誌など

逆境の中で精力的に事業展開

活字離れ、少子化、インターネットの普及など、出版業界を取り巻く環境の厳しさが伝えられています。業界誌のデータによると2013年の全国の出版社数は約3600社で、1990年代のピーク時に比べ約1000社減少しているとのこと。また地域別にみると出版社の約8割が東京に集中しています。

業界全体の低迷に加え東京への一極集中で、名古屋は大都市でありながら出版事業の谷間と見られがちです。しかし高い志で創業し、独自の価値観にこだわりながら精力的に事業を展開している出版社も少なくありません。それらの取り組みを通して名古屋の出版文化を検証してみました。



[特集] 多様な価値観で地域文化に貢献する名古屋の出版事業



平和への祈りを託し、名古屋・金沢間に2000本の桜を植えた国鉄バス車掌の物語『さくら道』（風媒社）



医療の届かないところに医療を届ける国際医療ボランティアの挑戦『飛べない鳥たちへ』（風媒社）



時代に敏感な情報発信を続けるタウン情報誌『ケリー』（ゲイン）



富裕層のアラフォー女性をターゲットにした『メナージュケリー』（ゲイン）

風媒社

マスの発想ではなく 弱者の視点で時代と世界に向き合う

歴史、哲学、地域問題など広範なテーマに取り組む総合出版社として、名古屋の草分け的な存在の風媒社（名古屋市中区）。「小学校6年で敗戦を迎え、父親世代の価値観との葛藤が自己形成に影響しました」と語る稲垣喜代志会長が、日本読書新聞の記者を経て1963年に創業しました。当時は日米安保と東西冷戦、高度成長と公害問題、アフリカ諸国の相次ぐ独立、ベトナム戦争など、国内外とも大きな変化と課題に直面していた時代です。たった一人からスタートした出版事業にも「名古屋から国際的な文化を全国へ向けて発信したい」との強い思いがありました。

大学の紀要、社内報の制作などを収入の足しにしながら初めて世に問うた本は『はるかなる陽（ひ）ざし—新堂広志歌集』です。小児まひで手足の自由を奪われた豊橋の男性が、ペンを口にくわえてつづった自伝的歌集でした。それから『主婦の戦争体験記—この声を

子らに』（いずみの会「戦争体験記」編集委員会）『うず潮の学校—一島の教師の記録』（篠島中学みおの会）など大手メディアからも注目される出版が続きました。

現在では取り扱う分野も発行点数も大幅に拡大していますが、弱者の視点を大切にすること、執筆者を在野から発掘すること、市民の活動に寄り添っていくことなどの基本姿勢は一貫しています。「今後も東京が見落としているもの、マスの発想でないものにこだわり、風媒社ならではの出版を続けていきたい」と稲垣氏は語っています。

ゲイン

ライフスタイルを向上させ 街を元気にする提案を続けたい

政治の季節を過ぎ、都市の風景を一変させた高度成長を終え、人々が豊かで成熟した消費生活を謳歌していた1987年、タウン情報誌『ケリー』を発行する出版社ゲイン（名古屋市中区）が誕生しました。それまで飲食業に携わっていた創業者の藤井英明社長が、

名古屋出版前史

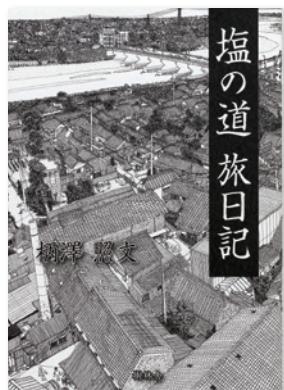
江戸時代になり世の中が安定すると、藩学の奨励や娯楽の普及に伴い徐々に出版も盛んになりました。民間事業者はおおむね木版印刷と販売を兼ね、書肆（しよし）、書林などと呼ばれました。出版物の量や事業者の数は京都、大阪、江戸の三都で約9割。最初は京都が中心。やがて江戸へと移っていきました。

尾張はそれに次ぐものの微々たる規模でした。地方都市の出版が苦戦した理由の一つには、三都の書肆が株仲間を作り、仲間以外の事業者が三都で商うことなどを厳しく規制したという経緯もあります。こうした中で尾張では「風月堂」「永楽屋」などが奮闘して大店に成長。永楽屋は江戸への出店も果たしました。また江戸時代から明治時代にかけて貸本屋を営んだ「大惣」は全盛期に日本一の蔵書数を誇り、坪内逍遙が幼少のころ足しげく通い、知識の基礎を築いたことでも知られています。

出版物では、著名なもののひとつに『尾張志』があります。藩命で編纂された膨大な地誌です。また『尾張名所図会』（※本誌P.9参照）は、多くの挿絵を駆使したガイドブック。江戸時代後期から明治時代初期にかけて刊行され、明治になってからは永楽屋が手がけました。こうして名古屋の出版事業は、近代、そして今日へと受け継がれてきたのです。



江戸時代の書肆「風月堂」（尾張名所図会より）



岡崎から飯田まで古道「中馬街道」の痕跡を探しながら描いたスケッチ集『塩の道旅日記』（樹林舎）



古写真を発掘して現在の写真と対比する『今昔写真集』シリーズ（樹林舎）

飲食文化を紹介するメディアを自ら立ち上げたのです。『ケリー』はその後、より地域に密着した情報誌として今日に至っています。

同誌が全国でも有数の長寿メディアとして支持されてきた背景には、時代に敏感な情報発信があります。「例えば物的欲求の強かったバブル期は、いいものを手に入れる＜モノ消費＞、現在は、豊かな暮らし、体験を手に入れる＜コト消費＞にお金をかける傾向があり、それをくみ取った情報を発信している」（山田賢治編集長）といます。

同社は『ケリー』以外にも、さまざまな情報誌を発行しています。富裕層のアラフォー女性をターゲットにした『メナージュケリー』、カフェ、スイーツ、デート、旅などワンテーマに絞り込んだムック。ほかにもフリーマガジン、書籍など多種多彩です。いずれもターゲットを明確にし、情報と市場とをジャストフィットさせることが基本方針です。

「役に立つ情報は人を動かし、ライフスタイルを向上させ、街を元気にします。決め手はライフスタイル提案の的確さ。そのために今後は、広さより深さにこだわった情報を追求していきたい」と山田編集長は話します。

樹林舎

地域の歴史や文化を発掘し 資源として紹介するために

「名古屋には全国レベルの歴史や文化があるのに、それが出版に活かされていない」と語るのは、樹林舎（名古屋市中白区）の山田恭幹代表です。創業は2004年。前記2社に比べ、最も新しい会社です。しかしこだわるのは地域にうずもれた古い歴史や文化の発掘。それらを大切な資源として人々に紹介していくことを基本テーマに、出版事業をスタートさせました。

創業時に発刊したのは『塩の道旅日記』（柄澤照文著）と『わが街ビルディング物語』（瀬口哲夫著）。前者は古道「中馬街道」の跡を探しながら描いたスケッチ集。後者は、かつて街づくりの主力を担ったビルたちの思い出や歴史をまとめたもの。いずれも人々の胸に残る記憶という貴重な資源を、美しいスケッチや物語としてよみがえらせるものでした。

その後の出版事業もこれが基本路線です。柱となっているのは、古写真を発掘して現在の写真と対比する『今昔写真集』シリーズと、写真アルバム『昭和』シリーズ。取材者が地域に入り込み、地元の協力者とともに貴重な古写真を発掘し編集するもので、「懐かしく家族で楽しんでいます、というお便りをいただくこともあります」と山田代表は言います。

戦時下の空襲、戦後の高度成長などにより、昭和は歴史上最も短期間に都市の風景が激変した時代です。失われた風景は、人々の胸にしまわれた大切な思い出であり、地域の歴史・文化でもあります。それを再び目にするのできる両シリーズは多くの読者に支持され、最近では東海地方だけでなく西日本へも取材エリアを広げています。

出版事業の成否は、 発行者のこだわり次第

私は1970年代に個人経営の出版をスタートさせました。初めて出したのは、自著の『名古屋いまむかし』。足元の歴史を分かりやすく伝える本で、今もそれをテーマに出版や執筆を続けています。名古屋は出版事業者も少ないし、出版事業に対する評価も高いとは言えない。遊びや文化より働くことを大切にする勤勉さの裏返しかも知れないですね。

インターネット時代の出版が苦しいのは事実。でも私のように地域に特化した零細出版を続けられるのは、ネットのおかげでもあるのです。ネッ

トという幅広い情報発信と販売のツールが、書店販売だけでは不可能な事業を可能にしてくれました。

出版事業の成否は、発行者のこだわり次第です。名古屋で今頑張っているのは、強いこだわりを持った出版社です。私も売れる本を出してきたわけではないが、出せば目に止めてくれる人がいます。今後、若い人が新しい感覚で出版に取り組んでくれば、従来にはないものが生まれる可能性は十分あります。それに期待したいですね。

ブックショップ・マイタウン
代表
ふなはし たけし
舟橋 武志さん

